忘れられた一文芸の系譜

―加藤清正伝承から見た「壬辰倭乱物」―

金　時　徳

1．はじめに

江戸時代には、様々な軍記物語が人気を集めていましたが、その中に、今は忘れられたように見える、もう一つの軍記物語の系譜がありました。1592年（文禄元）から1598年（慶長３）にかけて韓半島（朝鮮半島）で、韓国（朝鮮）・日本・中国（明）の三国がぶつかった「壬辰倭乱」（いわゆる「文禄慶長の役」）を扱った一連の作品群がそれです。中村幸彦氏が「朝鮮軍記物」と命名されたこの「壬辰倭乱物」は、既存の研究では単に「太閤記物」の一部とだけ見なされてきましたが、そのような解釈を以ては把握しきれない多様な特徴を、この壬辰倭乱物は有しています。

> しらぬ行衛の風波を凌て見も聞もせぬ人の国へ怨もなきに兵戈を起し（中略）其いにしへ神功皇后三韓を征伐ましますより朝鮮は我国の犬と勅ありて（『絵本朝鮮軍記』）①

この『絵本朝鮮軍記』の文章では、二つの対立的な立場が衝突しているのが分かります。壬辰倭乱物の内部では、歴史上初めて日本の軍隊が海外に出て異国を経験した、特記すべき事件であったとの認識と、いわゆる「神功皇后の三韓征伐」という、伝統的な韓国認識とが衝突しているのです。

戦後作成された短編的な作品を整理して、初めて７年戦争の全体像を提示した『太閤記』、中国の『両朝平攘録』や『武備志』等の影響を受けた『豊臣秀

吉譜』と『朝鮮征伐記』、そして韓国の柳成竜が著した『懲毖録』が17世紀末の日本に揃うと、これらの作品を総合した『朝鮮軍記大全』・『朝鮮太平記』・『絵本朝鮮軍記』・『絵本太閤記』等の作品が現れます。壬辰倭乱物の展開に関しては中村氏や韓国の崔官氏が概観されたことがありますが、その具体的な展開や、他の文学ジャンルとの比較研究はまだなされていないようです。それで本発表では、特に、「壬辰倭乱物」の特徴をもっともよく示している事例として、加藤清正のオランカイ（兀良哈）合戦伝承を取り上げて、江戸時代における壬辰倭乱物の位置、及び研究の可能性を検討していきたいと思います。以下、言及される作品の成立事情、および分類に関しては［補注］にまとめましたので、御参照ください。

2．加藤清正のオランカイ合戦伝承の展開

では、本論に入ります。本論に登場する韓半島の地名に関しては［図１］を御覧ください。

1592年４月に壬辰倭乱が起こると、加藤は７月に咸鏡道で朝鮮の二人の王子を生け捕り、続いて中国の東北三省（日本でいう満州）に進入し、その地域の住民である「オランカイ」と合戦しました。「オランカイ」とは韓半島の住民が東北の異民族を呼んだ名称でした。[②]

初期の壬辰倭乱物である『太閤記』・『豊臣秀吉譜』・『朝鮮征伐記』において、オランカイとの合戦記事は、

主計頭おらんかい境に近付、度々挑合戦村菴里屋悉令放火、振猛威事甚以夥し。（『太閤記』）

然後清正率兵而進到兀良哈境不逢國王而皈會太子之逃行。（『豊臣秀吉譜』）

王子后妃もあはてふためき兀良哈をこゝろざしてをちたまふ（中略）加藤

は兀良哈のさかひまで入てさがしけるが。これは朝鮮の地にあらずして。人間のなりまでちがひければ。此すぢへはをち給はずとて。二三日路引きかへしけるが。(堀本『朝鮮征伐記』)③

のように簡単です。初期作品において叙述の重点は二人の王子の生け捕りに置かれていたのです。オランカイとの合戦の様子が具体化するのは『清正高麗陣覚書』をはじめとする加藤系作品からです。「高麗の王ハ御兄弟ともニ是より

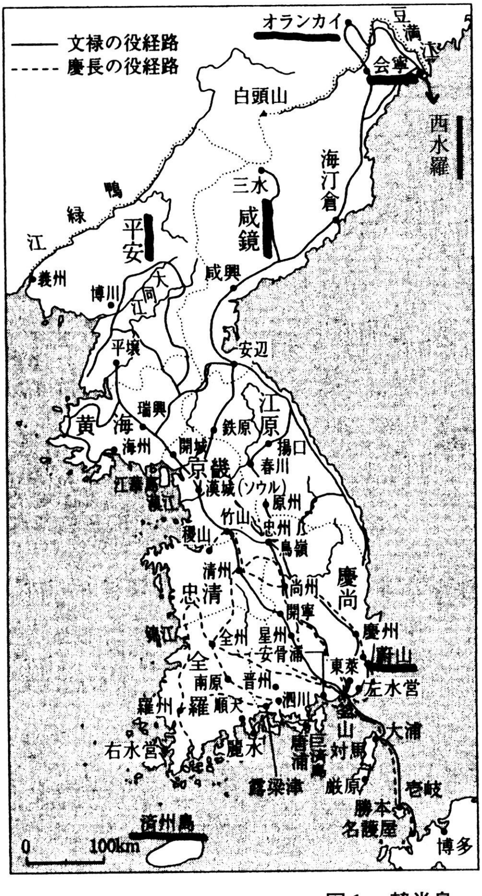


図1　韓半島

日本の歴史15『織豊政権と江戸幕府』(講談社、2002) 308頁

・会寧
ホェリョン
(ほいれぐ)
・咸鏡道
ハムギョンド
(えあんどう)
・平安道
ピョンアンド
(べあんどう)
・済州島
ゼジュド
(せいしう・さいしう)
・西水羅
ショスラ
(ここがもともとの
「せいしう」らしい)
・蔚山
ウルサン
(うるさん)

奥へ御通り候」[4]との高札を発見した加藤は、朝鮮とオランカイとの境界にある「ほいれぐ」という所に着きます。[5]「ほいれぐ」の大将が「高麗王の御兄弟」を生け捕って加藤に渡し、また、「おらんかいと申所は弓取多、事外すくやかなる国にて御座候」と言ったら、加藤は「さらば日本人の弓矢取候様子、おらんかい人ニ弓矢取候て見せ可申」[6]く、オランカイの13ヶ城を攻め落とし、朝鮮への帰り道に「せいしう」という所で日本の富士山を西南に見ます。そして「せるとうす」[7]という朝鮮の武将を生け捕り、中国の勅使と面談した、等の記事が続きます。「其の異本と認むべき我自刊我書本『清正朝鮮記』」[8]では、加藤軍がオランカイの都まで放火したとの記事が付け加えられ、『清正高麗陣覚書』を始めとする関連作品を合わせて加藤清正の総合的な伝記の作成を図った『清正記』では、加藤が生け捕ったのは朝鮮の国王ではなく朝鮮の王子であって、加藤軍が攻め落としたオランカイの城の名前が「ゑんたん」であったとなっています。

ところで、壬辰倭乱の時に朝鮮王朝の官僚であった柳成竜が著した『懲毖録』の和刻版が1695年（元禄８）に京都で刊行されると、[9]その影響を受けて1705年（宝永２）に『朝鮮軍記大全』と『朝鮮太平記』が刊行されます。この両書の序文をご覧になりますと、

> 夫今世見ニ在ル所ノ。太閤記。太平記。続太平記。九州記。清正記。同日記等ハ。其大概ヲ載スル者ニシテ。然モ其記スル処。同事異論ノ一決シガタキアリ（中略）**惟リ朝鮮国。柳左相成竜ガ。懲毖録ト。本朝堀正意ガ。征伐記アリ。其乗スル処簡要ニシテ。書スル処質直ナリ**。然レドモ懲毖録ハ。彼国ノ書ニシテ。朝鮮ノ記ハ審密ナレドモ。我邦ノ事業ヲ不知。征伐記ハ。本朝ノ述ナレバ。我軍将ノ謀戦ハ明ナレドモ。朝鮮ノ時論ニ暗シ。依茲テ今我記スル所ハ。林翰林ノ応（ママ）台命テ書スル処ノ。豊臣家譜ヲ以テ。其場ヲ定ルノ幹楨トシ。懲毖録。征伐記ヲ取テ。左右翼ヲ張リ。（『朝鮮軍記大全』。強調は筆者）

於是竊集於明鮮倭士之諸書探於和朝諸家之秘記而捨虚拾実是正之積成三十巻（『朝鮮太平記』）[10]

と、三国の作品を対照して総合的な作品を成すとの意識がはっきりと表れています。このような作業は韓国と中国では、当時なされていなかった動きで、日本の壬辰倭乱物の特徴と重要性をよく示しているといえます。『懲毖録』が加藤軍のオランカイ合戦伝承に影響した事項としては、加藤軍が朝鮮の王子を生け捕る前に朝鮮の武将である韓克諴の部隊と衝突したこと、朝鮮の王子が生け捕られた所といわれた「ほいれぐ」が実は朝鮮の「會寧」で、その所の大将の名前が「鞠景仁」であったこと、そして、加藤清正を咸鏡道へと案内させられた朝鮮の通訳官である「咸廷虎」という人が紹介される等、朝鮮の人名・地名が具体化したことなどがあります。

3．異国から異界へ

では、オランカイ合戦伝承中もっとも混乱した、オランカイからの帰り道の「せいしう」で加藤が富士山を見たとの伝承を検討します。日本から西にある朝鮮に行った日本軍が、朝鮮の「せいしう」に至っては、逆に東から西へと日本の「富士山」を見たとの内容ですが、この倒置された方向感覚は、オランカイ伝承が有する「異界進入譚」という性格をよく示しています。壬辰倭乱物では「異国性」が主な情調をなしていますが、オランカイ伝承に至ると、

これは朝鮮の地にあらずして。人間のなりまでちがひければ。（堀本『朝鮮征伐記』）

此おらんかいと申国ハ日本にてハゆめゆめしらざる国にて候朝鮮国へわたり聞候へば（『清正朝鮮記』）[11]

のように、「異国性」が「異界性」にまで発展する様相を示します。

壬辰倭乱物において、「せいしう」という所は松前の北にあり、西南に「富士山」が見える所ですが、これを地図で描くと図２のようになります。このような逆転した方向性を、大体の壬辰倭乱物は無視するか（『朝鮮軍記大全』）、またはそのまま受け入れますが（『絵本朝鮮軍記』『絵本太閤記』など）、『絵本朝鮮軍記』だけは奇想天外な方法でこの問題の解決を試みます。図３・図４・図５・図６・図７を御覧ください。図３・図４・図５・図７は実際の韓半島の地図と一致していますが、図６の『絵本朝鮮軍記』に載っている地図の場合は、韓半島の東と西が逆になっていて、韓半島の東に中国があり、西に中国の東北三省のオランカイが位置しています。日本人がよく知っている日本列島の東西は正しくなっていますが、もし日本列島の東と西をも逆にすると、図８のように「せいしう」から「富士山」が西に見えるようになります。このような意図の基で『絵本朝鮮軍記』の韓半島の東西が逆転されているとの断言はできませんが、可能性はあると考えられます。しかし、このようなトリックでは問題は解決できないし、しかもこの「せいしう」記事にはもう一つの問題があります。この「せいしう」という地名は『清正高麗陣覚書』などの加藤系作品ではただ仮名で書いてありますが、『朝鮮太平記』で「済州」との漢字が当てられ、それ以後の作品では漢字の読みに従って、「せいしう」ではなく「さいしう」となってしまい

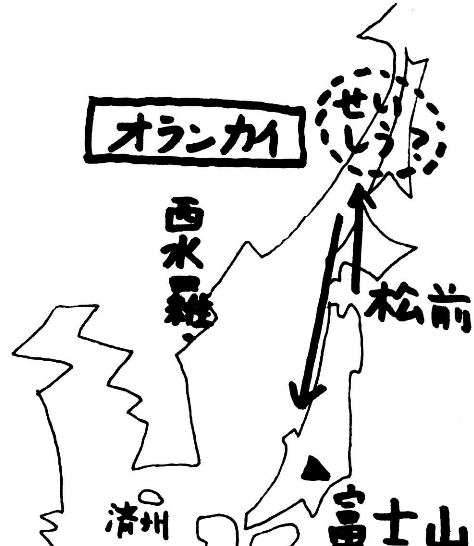


図２

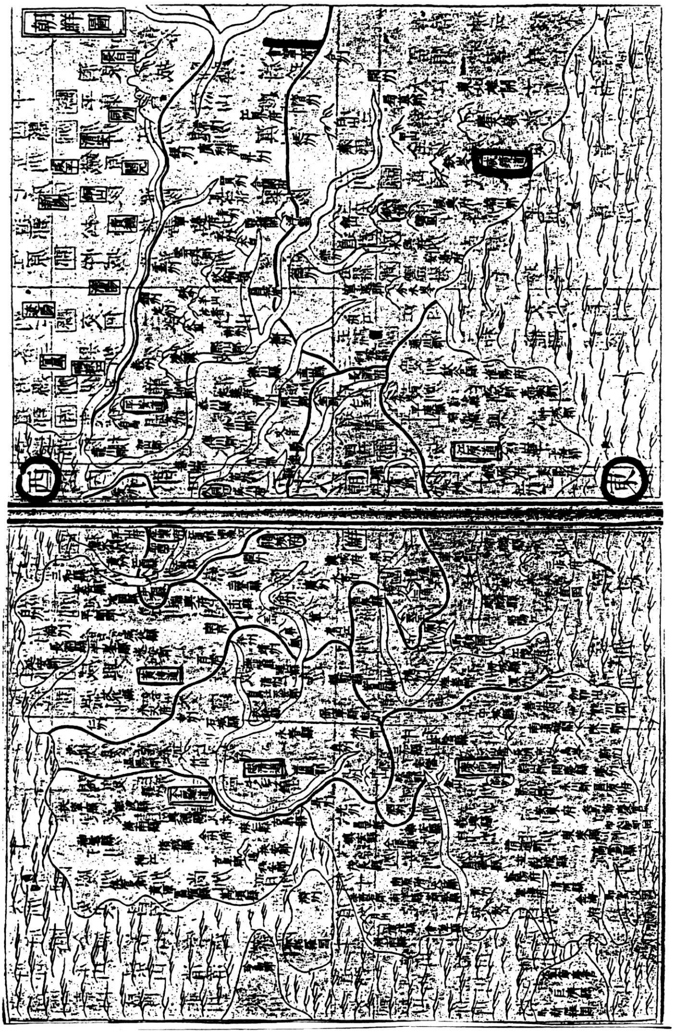


図３　和刻版懲毖録

ます（せいしう→済州（せいしう）→済州（さいしう））。ところで、実はこの「済州」という漢字は韓半島の南にある島の名前の漢字です。もとは韓半島の東北部の地名の音写であった「せいしう」[12]の語源が忘れられた時、「せいしう」という発音と似た読み方をする「済州」という漢字が新たに当てられたのです。それで、韓半島の北に進んだはずの加藤軍が、韓半島の南で富士山を見たことになって、問題はい

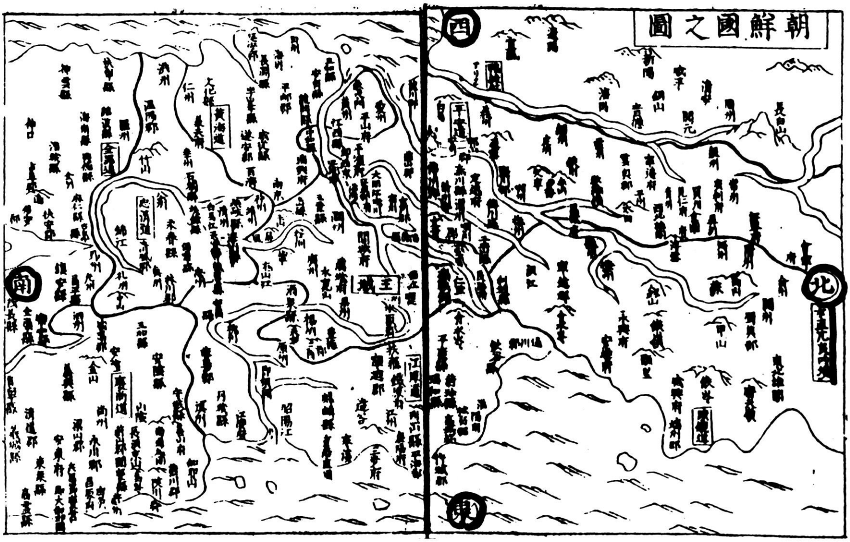


図4　朝鮮太平記

っそう複雑になりました。それで、江戸末期の『朝鮮征討始末記』では、

> 一書に加藤清正の兀良哈を陥る々事或ハ女直に於て合戦或ハ済州を攻め落す事など云るハ更に拠なき謬説なり清正ハ朝鮮の北地咸鏡道鏡城会寧まで攻入られたる事にて女直界とハ云へども女直迄ハ未だ遼に隔たる事なり（中略）済州ハ朝鮮南海中全羅道の洋に日本里程にて凡七十里ほど出はなれ往昔耽羅国と云る一島にて日本五島と対頭すといへり咸鏡道は蝦夷と遥に対頭すと**云是済州と咸鏡道等ハ南北の背馳にて曽とも清正の攻めざる所にて取にたらざるなり**（『朝鮮征討始末記』。強調は筆者）⑬

と、加藤清正が「せいしう」に行ったとする伝承そのものを虚構と断定してしまいます。このようにして一種の「加藤ファンタジー」が終末を告げることになったのですが、「せいしう」伝承における方向・位置の混乱は、加藤のオランカイ伝承に内在する「異界性」の反映ではないでしょうか。

図5　朝鮮軍記大全

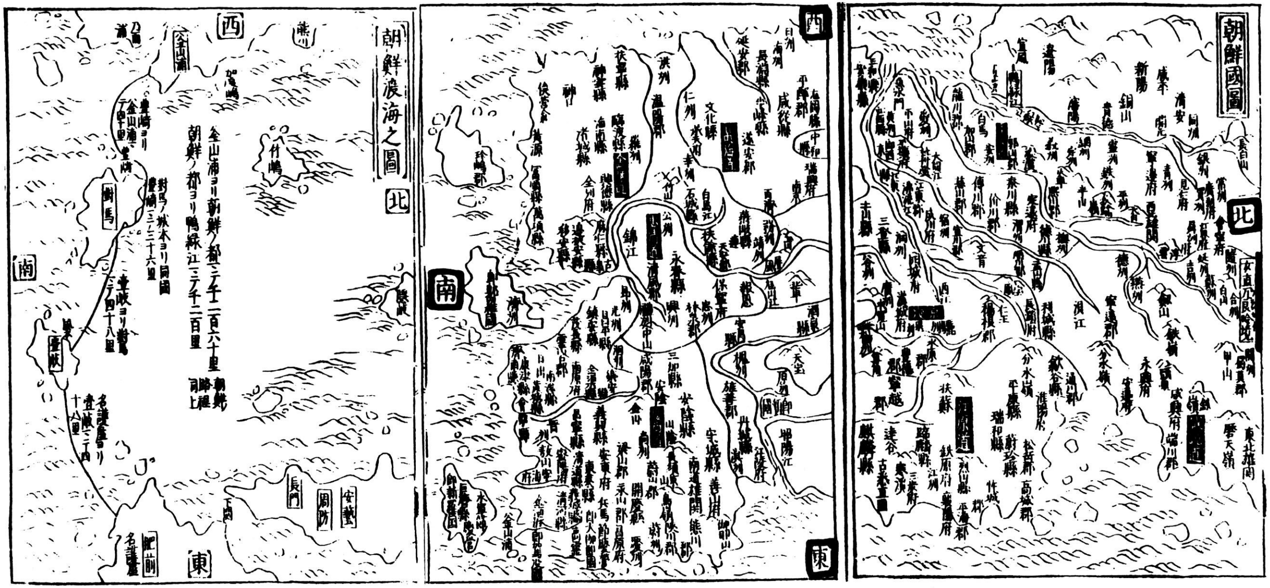
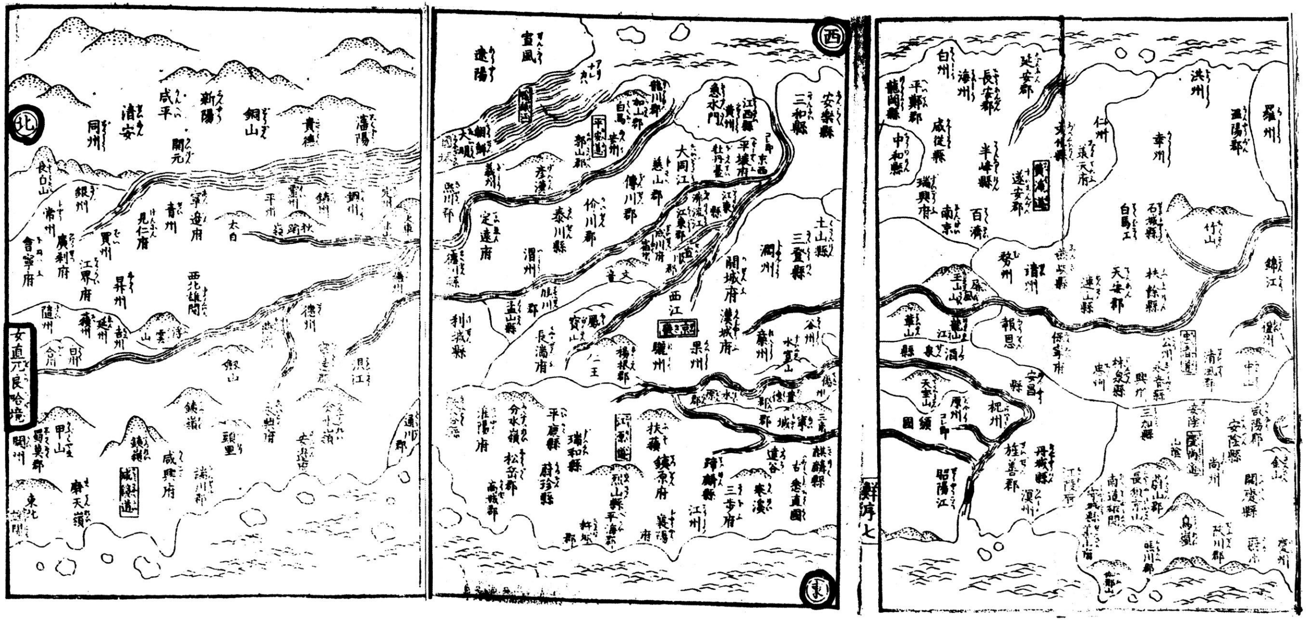


図６－１　絵本朝鮮軍記


北
西
東
女直兀良哈境
咸鏡道
平安道
黄海道
京畿道
江原道
忠清道
慶尚道
全羅道
清安
同州
咸平
新陽
銅山
開元
貴德
瀋陽
咸興府
鴨緑江
漢城府
開城府
大同江
臨津江
白馬江
洪州
羅州
錦江
鮮傳七

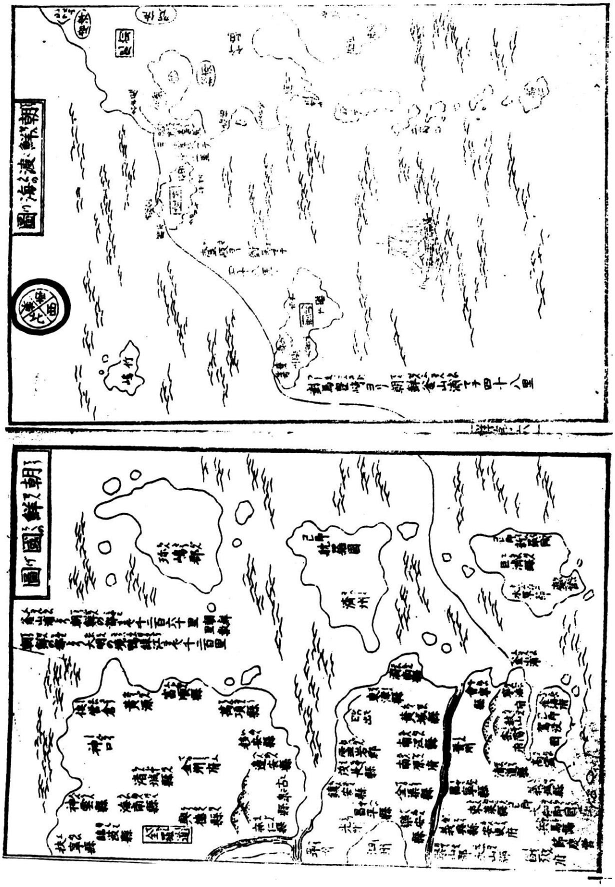


図６－２　絵本朝鮮軍記

4.「仁徳」の武将、加藤清正

つぎに、「仁徳」の武将としての加藤のイメージの形成過程を検討します。「慈悲」の武将としての彼のイメージは、

> 主計頭は咸鏡道に至て勢を入、近辺之百姓等如前々還住せさせ、撫育之功を成、兆民等も年の暮に成ければ越年之便もなし。いかゞ致し候はんやと侘しか共、其求に応ずべき行もなかりしかば、酒肴など施しけり。(『太閤記』)⑭

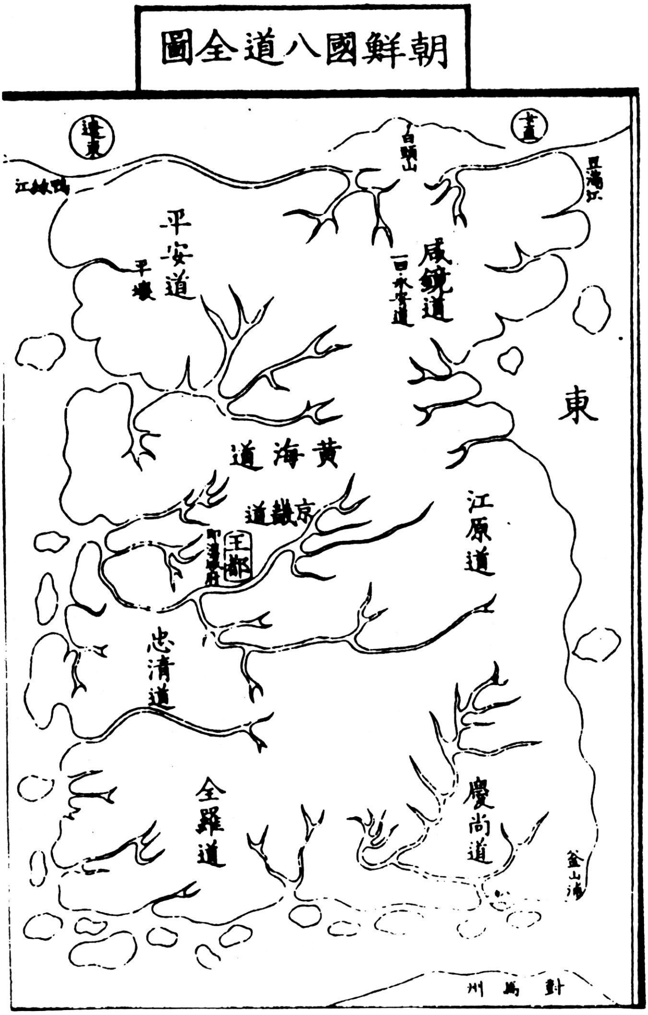


図７　朝鮮征討始末記

のように、すでに『太閤記』において見られますが、特に加藤系作品は「慈悲」の武将というイメージの形成の過程をよく示します。『清正高麗陣覚書』『清正記』等には、中国皇帝の勅使が加藤に、朝鮮の王子と朝鮮第一の美女の返還を要求する記事が載っています。この要求に対して加藤は、

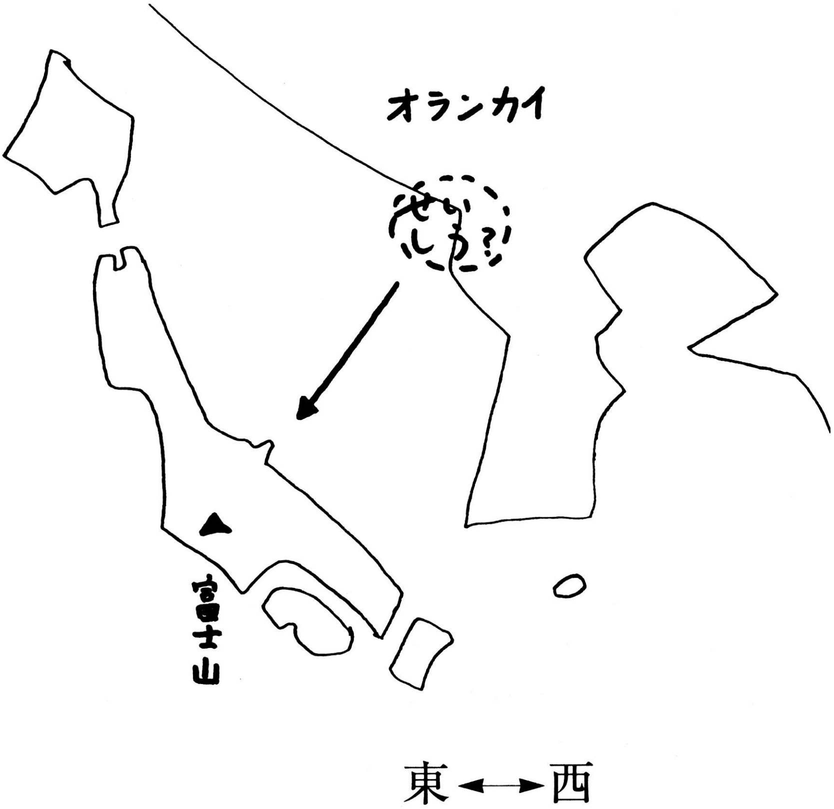


図８

清正ハ法度をよくし**無科者を不切慈悲深き者**候由兼而叡聞に達す**朝鮮国王子並朝鮮第一の美女を**清正手に生捕之由右之面々此方へ可相渡（中略）**美女を外にて可渡とてはた物木にあけほなかの槍にて自身いもさしに突おとす**を勅使見届て舌を振ひおちおそれ帰国し鬼上官と大明迄も風説す（『清正記』。強調は筆者）⑮

と、美女を槍で刺し殺してしまいます。ところが、『清正記』の修正を図った『続撰清正記』で、この記事は批判されます。先の例文を見ると、加藤は、中

国の勅使に「清正は法度をよくし無科者を不切慈悲深き者」とたたえられたすぐ後、何の理由もなく美女を刺し殺してしまいますが、これに対して『続撰清正記』の作者は、

朝鮮第一の美女を、清正自身鑓にて突殺して、大明国の勅使に見せられたると、本書（『清正記』を指す－筆者注）**にあり。是れ虚説なり。終に此物語致したる者なし。此儀、偽の仔細を、能く鑑みらるべし。**初巻に記す如く、佐々陸奥守、武道のみにして、文道を知らざる故に、肥後国治まらざる事を、能く清正見及び、文道の端をも行ひ、慈悲を以て治めば、治まらずといふ事あるまじきと窺ひ知りて、前篇に記す如く、一戦もせずして、肥後国治められたる故、今高麗国退治の両大将の其一人に選ばれ給ふ人が、謀になりとも、君子の道をこそ行ひて見せ給ふべきに、匹夫の勇を学び、美女を自ら殺害致さるべき理なし。**第一此美女に咎なし**（中略）**清正若年の時、肥後一国を治むるにさへ、大人の道の端を学びて、無為に治められたる人が、大国退治の其武将に備はりたるに、罪なき女人を、軽々しく自身鑓にて突く事、思も寄らざる事なり。**（『続撰清正記』。強調は筆者）[16]

と『清正記』の記事を批判します。『続撰清正記』より後に刊行された『朝鮮太平記』では、

会寧吏鞠景仁率其類叛先縛**王子及従臣**以迎賊賊将清正解其縛留置軍中（『懲毖録』。強調は筆者）[17]

との『懲毖録』の文章の影響を受けて、この部分が、

清正ハ。智仁勇ノ三徳ヲ兼テ。朝鮮ノ士民ト云ヘドモ。科ナキ男女ヲ殺サズ。仁義ヲ守ル勇士ノヨシ。遠ク天朝ニ達スル処ナリ。就テハ**朝鮮ノ王子**。

従臣。清正手へ擒トセル旨叡聞アリ。急ギ両王子。及ビ従臣悉ク。此方へ還シ渡スベシ。(『朝鮮太平記』。強調は筆者)[18]

のように、「美女」が「従臣」にかえられていて、美女の記事は無くなっています。また、加藤系作品の内容に批判的な[19]『朝鮮軍記大全』以後の作品では、

此時国妃ハ侍婢等モ多カラデ落人トナリタマフガ。頚ニ一ッ物ヲ懸ケ面ヲ覆フニ巾ヲ以テシ。倭人ノ追フニ路ニアヘルヲ清正ガ手ノ者トモ。スデニ是ヲ追捕ベシトシタリシニ。清正コレヲ制禁シ其顔面ヲ見ルコトナカレ。侵シ掠メ触レ汚スコト為スベカラスト下知ヲナシ。飲食ヲ贈テ是ニ与へ。意ノママニ逃レシム。其頚ニ掛タルハ牛ノ脯ト聞ヘケル。**清正ハ其驍勇ノミナラデ情マデフカキ人ナルカナト感ゼヌ者ハ無リケリ**。(『朝鮮軍記大全』。強調は筆者)

(清正) 両太子を請ふて輿に乗しめ安辺地名の方へ帰らんとす太子に附添ひ参らせし官女侍婢常に見なれぬ日本人の恐ろしく輿にすがり声をあげこはいかにならせ給ふ御事にやと伏転び泣さけぶを雑兵どもあらあらしく嘖り罵り手を取て引立るに頚に何やらん黒き物をかけ覆面して顔を包めり兵ども打笑ひ彼覆面を取らんとす清正遥に是を見て大に制し其面を見る事なかれ侵し恥かしむる事有べからずとて心の侭に落行しむ是を見て**清正は驍勇のみにあらず仁義厚く情有大将かなと感せぬ者はなかりける**。(『絵本太閤記』。強調は筆者)[20]

と、女たちを苛めないよう、加藤が兵士たちに命令したとの記事が付け加えられます。

このように「仁徳」の武将としての加藤のイメージが強調される現象は、1597年の蔚山の合戦記事でも発見されます。中国の『両朝平攘録』には、

（清正）先聞大兵来、即以降人及病弱者置外、而悉歛精鋭保守山地、（『兩朝平攘録』）[21]

との記事がありますが、壬辰倭乱に関する全般的な叙述においては『兩朝平攘録』のそれに従っている『豊臣秀吉譜』・『朝鮮征伐記』等の初期の壬辰倭乱物が、この蔚山篭城の記事では、

且近郷之商人民黎驚明兵之大至携其妻子皆入地中故穀粟尤乏（『豊臣秀吉譜』）

唐人の大軍に驚き、近辺の商売人、百姓まで、妻子を連れ逃げ入りたれば、雑兵かけて二万人ばかり也。（堀本『朝鮮征伐記』）[22]

のように、『兩朝平攘録』の文章とは相反する叙述をなしています。そして『絵本太閤記』に至ると、

清正常に仁恵深く朝鮮の人民をも敢て猥りに殺す事なく百姓等みな懐き随ひ我朝鮮の苛き政事に苦んより鬼将軍の幕下に民たらんは却て身を安んずるに便よしとて聞つたへ聞つたへ諸方の百姓多く此蔚州国名に集りて耕をいとなみ交易を事として此時城下の人民二万余人に及べり然るに大明の軍兵攻寄ると聞百姓ども大きに驚き取物も取敢ず皆城中へにげ入たり抑大明大軍を起して爰に至るは日本の寇を退け朝鮮を安んぜんが為なり然るを朝鮮の民として却て大明の寄るを恐れ国の寇なる清正を慕ひ城中に逃篭りて死を倶にせんと覚悟しけるは実に清正の仁徳にあらずして何ならんや。（『絵本太閤記』）[23]

のように、さらに加藤の「仁徳」を強調する作者の解釈が付け加えられます。

この外にも、壬辰倭乱物には、加藤に捕られていた朝鮮の王子たちが、感謝の意を込めて加藤に届けたという手紙[24]や、加藤の祠をソウルに建てて祭ることを告げる朝鮮国王の手紙[25]というものも載せてあります。このようにして、朝鮮の民衆だけでなく、朝鮮の王子や国王までが加藤の「仁徳」の感化を受けることになり、日本の武威を異国に輝かせた人物としての加藤のイメージは成立していったのです。

5．侵略から被侵略へ

それでは、つぎのテーマに移ります。

『清正記』に代表される加藤系作品において、加藤がオランカイを攻撃した理由は、

> 清正ハおらんかいの様子をほいれく人に通詞を以尋らるゝにおらんかいと申ハ弓の上手にて心もかひがひ敷国のよし申清正手を打**日本人の弓矢の風をおらんかい人にみせん**（『清正記』。強調は筆者）[26]

のように、「日本人の弓矢の風をおらんかい人にみせん」ためでした[27]。しかし、『朝鮮軍記大全』ではその理由が変わります。即ち、

> 清正スデニ両王子ヲ獲トシ安辺ニ帰ラントスルニアタツテ。兀良哈ノ夷トモ数万人起来ルト聞ヘシカバ。（『朝鮮軍記大全』）[28]

と、加藤が北に進んだ理由は朝鮮の王子の生け捕りであって、オランカイへの進入ではなかったが、オランカイ側から攻め寄ったので反撃したことになっています。『絵本太閤記』では、

朝鮮の国境より北に隣れる国を兀良哈国名といふ其国の夷ども会寧府地名まで日本勢攻入朝鮮の太子を捕へ勢ひを振ふと聞て**朝鮮は隣国なり唇破れて歯冷し捨置きなは我国へも押来るべしいさや進んで日本勢を討べし**とて数万騎の軍兵を催し境近く押寄せたり清正聞て悪き夷どもの行跡かな其儀ならば逆押して打崩せ（『絵本太閤記』。強調は筆者）[29]

と、オランカイが加藤軍に攻め寄ったのは、朝鮮の危機を助けるためだったとの解釈まで付け加えられます。このように、加藤軍からオランカイへの攻撃が、オランカイから加藤軍への攻撃と逆転するには、

彼所之一揆起り（中略）おらんかい人猛勢にて取巻、城を責申候、（『清正高麗陣覚書』）

然処に吉州に被籠置七人之者共方々より申越趣ハ朝鮮おらんかい人猛勇にて城を攻候由申来る（『清正記』）[30]

等の、加藤軍の占領に抵抗して蜂起した朝鮮の義兵に関する伝聞がきっかけとなったと考えられます。朝鮮人・オランカイの攻めかけが加藤軍の侵略への抵抗であったことは忘却され、オランカイ側から侵略してきたとの「被侵略意識」だけが強調されるのです。

日本側からの侵略が日本への被侵略意識へと逆転する現象は、壬辰倭乱物の外の文学でも発見できます。『日本書紀』等の古代の作品における、いわゆる「神功皇后の三韓征伐」とは、神功皇后が神託に従って外国の「三韓」[31]を征伐したという話でしたが、平安末期のいわゆる「新羅海賊」や、1274年（文永11）・1281年（弘安４）の二度にわたるモンゴル（元）・高麗の日本攻撃（「むくり・こくり」）などを経ると、蒙古・三韓の異国が日本を侵略してきたので、神功皇后がこれを反撃して三韓まで征伐したと主張する『八幡愚童訓』

甲本などの作品が台頭します。加藤のオランカイ侵略伝承の逆転と同じように、日本側から三韓へ侵略したとの伝承が、三韓側から日本への被侵略に逆転されているのです。このような被侵略意識はすでに『承久記』などの古代末期の作品に見え、「百合若大臣物」など中世文学に広く受け継がれますが、[32] ここでは、特に『太平記』に注目したいです。『太平記』には、

> 千古之記スル処ヲ看ルニ、異国ヨリ吾朝ヲ攻シ事ハ、開闢ヨリ以来、已ニ**七ヶ度**ニ及ヘリ（西源院本ほか。強調は筆者）

> 千古の記文を看れば、異国より吾が朝を攻めし事、開闢より以来すでに**十一箇度**に及べり（天正本。強調は筆者）[33]

のように、異本によって被侵略の回数が７度、または11度であったと略述された後、「神功皇后の三韓征伐」、そして蒙古襲来の記事に言及しますが、これと同じような構成が壬辰倭乱物でも発見されます。壬辰倭乱物において秀吉は、

> **古来中華之侵我国者屡矣**然本朝伐外国者神功皇后西征三韓之後千歳寥々（『豊臣秀吉譜』。『朝鮮軍記大全』・『朝鮮太平記』・『絵本朝鮮軍記』・『絵本太閤記』も類文。強調は筆者）

> **古より異国の日本を攻むる事七度なり**。然れども本朝より、異国を攻めし事、神功皇后より以来、其例を聞かず。千載の間寥々たり（大関本『朝鮮征伐記』。強調は筆者）[34]

と、日本被侵略の回数と「神功皇后の三韓征伐」を略述してから朝鮮侵略を宣言します。壬辰倭乱物のところどころでは「神功皇后の三韓征伐」が思い出され、オランカイとの合戦をはじめとして、日本軍が難儀するたびに八幡の加護

にふれる[35]など、中世の関連作品との類似性が見られますが、特にオランカイ記事は、あのような類似性を具体的に示す事例であるといえるでしょう。

最近、小峯和明氏も「侵略文学」とのキーワードを以て中世文学の読み直しを提案されましたが、[36]海外との衝突に関わる文学では、このような特徴が広く認められるのではないかと思います。いままでの日本文学史で忘れられていた一つのジャンルであった壬辰倭乱物は、このような意味において、外のジャンル・外の時代の文学との比較へと拡張できる普遍性を有しており、今後、このような立場に立って研究を進めていきたいです。

6．おわりに

本発表では、江戸時代に享受された軍記物語の一系譜である壬辰倭乱物を検討し、特に、作品群の特徴をよく示している、加藤清正のオランカイ合戦伝承に焦点を絞ってみました。今までの日本古典文学の研究においてはあまり考慮されることのなかった壬辰倭乱物は、実は、近世の全時期を通じて著作・刊行しつづけられ、海外に関する近世日本人の教養形成に重要な役割を果たしていました。日本史上の最初の海外戦争であった壬辰倭乱は、近世社会に大きな衝撃を与え、様々な形で文芸化しましたが、その衝撃に対する反応は様々でした。その反応の一つは、日本軍が朝鮮という「異国」へ、そしてオランカイという「異界」へと進入したとする異国体験の記録を享受することによって、鎖国下における「外」への好奇心を満たすものでした。その場合、時間が経つにつれてその異国体験は幻想化かつ具体化する傾向を示します。もう一つの反応は、いわゆる「神功皇后の三韓征伐」伝説を史実として認めた上で、壬辰倭乱を神功皇后に続く「秀吉の三韓（朝鮮）征伐」として位置づけるのです。それで異国体験の衝撃を相殺し、特に加藤清正の「仁徳」を以て朝鮮の官民を感化したと主張することによって侵略を正当化します。最後に、新羅およびモンゴルへの警戒心・敵愾心から生まれた、古代末期以来の「被侵略意識」を継承して、加藤清正のオランカイ侵略、ひいては壬辰倭乱それ自体を、外部からの被侵略

への反撃であったと正当化していきます。

壬辰倭乱物は、太閤記物に付随する一部分に過ぎないのではなく、古代・中世の軍記物語の流れを汲む、ユニークなジャンルをなしています。この作品群が有している複合性の研究は、古典文学一般の理解にも多くの示唆を与えることができると思います。

［補注］　朝鮮軍記物の展開

崔官氏の「朝鮮軍記物の展開様相についての考察」(『語文』第118輯（日本大学国文学会、2004.3））に、壬辰倭乱物の展開様相の大概が整理されているのを要約して下に紹介する。

1．初期記録類

①参戦武士系統：『吉野日記』・『高麗日記』・『木村又蔵覚書』・『清正高麗陣覚書』・『清正朝鮮記』・『清正記』・『朝鮮渡海日記』・『朝鮮物語』・『立花朝鮮記』・『脇坂記』・『島津家高麗軍秘録』・『日新菩薩記』・『征韓録』など。

②従軍僧侶系統：『西征日記』・『朝鮮日々記』・『宿蘆稿』など。

また、作者の所属した部隊別にも分類できる：1番隊（『吉野日記』・『西征日記』など）・2番隊（『高麗日記』・『清正高麗陣覚書』・『清正朝鮮記』・『清正記』・『木村又蔵覚書』・『朝鮮日々記』・『朝鮮物語』など）・4番隊（『島津家高麗軍秘録』・『日新菩薩記』・『征韓録』など）・6番隊（『立花朝鮮記』など）・7番隊（『朝鮮渡海日記』・『宿蘆稿』など）

2．朝鮮軍記物

2－1．太閤記物：『大かうさまくんきのうち』・『太閤記』・『川角太閤記』・『豊鑑』・『豊臣秀吉譜』・『太閤真顕記』・『絵本太閤記』・『絵本豊臣勲功記』など。

2－2．朝鮮征伐記物：『堀正意本　朝鮮征伐記』・『大関定祐本　朝鮮征伐記』(一名『増補朝鮮征伐記』)・『朝鮮征伐軍記講』・『朝鮮征伐記評判』・『絵本朝鮮征伐記』など。

2－3。朝鮮軍記物の完成（韓国の『懲毖録』の登場）：『朝鮮太平記』・『朝鮮軍記大全』・『絵本朝鮮軍記』・『朝鮮征討始末記』など。

このような整理は基本的に正しいと思われるが、本発表の趣旨に合わせて、訂正・補完した形で下に提示する。

1．日本で作成された短編：崔官氏の提案のように、いくつかの主要な武将別に区分できる。その中で、今度の発表では加藤系作品の例を取った。加藤系作品の最初は『清正高麗陣覚書』(慶長年間）で、その異本的な作品に『清正朝鮮記』がある。『清正記』(1662年（寛文2）までに成立。1663年刊行）はこの2作に『木村又蔵覚書』などの覚書類をあわせて、総合的な加藤清正の伝記を志向した。この作品の補完・訂正を図ったのが『続撰清正記』(1664年刊行）である。『高麗陣日記』(1702年（元禄15）刊行）は、時代は遅れるが『清正高麗陣覚書』の内容とほとんど変りがなく、外の作品の影響はあまり見られない。ただ、加藤の語録などが追加されているが、これは『加藤家伝清正公行状奇之巻・正之巻』に受け入れられる。

2．短編の総合：『太閤記』（1625年（寛永２）自序）は、加藤系作品をはじめとする、以前の短編を総合して、日本内で最初に７年戦争の全体像を提示したことに意義がある。

3．中国の作品の影響：『両朝平攘録』（1606年（万暦34）序）・『武備志』（1607年（万暦35）起稿・1621年（天啓元）完成）などの中国（明朝）の作品が17世紀半ばに日本に紹介されると、それと日本の短編類・『太閤記』をあわせた作品が現れる。『豊臣秀吉譜』（1642年（寛永19）自跋）・『堀正意本　朝鮮征伐記』（1659年（万治２）刊行）・『大関定祐本　朝鮮征伐記』（1665年（寛文５）序）・『征韓録』（1671年（寛文11）序）などがそれである。

4．韓国の作品の影響：柳成竜の著書である、『懲毖録』（1599年（宣祖32）以後の４・５年間に草本が成立）・『西厓先生文集』（1632年（仁祖10）に本集20巻刊行）などの韓国（朝鮮）の作品が17世紀の後半に日本に紹介されると、日本・中国・韓国の三国の作品を合わせて1705年に『朝鮮軍記大全』（1705年（宝永２）刊行）・『朝鮮太平記』（同年刊行）の２作が刊行される。『朝鮮通交大紀』（1725年（享保10）自序）・『太閤真顕記』（1787年（天明７）以前）・『絵本朝鮮軍記』（1800年（寛政12）刊行）・『絵本太閤記』（1797年（寛政９）－1802年（享和２）刊行）・『征韓偉略』（1831年（天保２）刊行）・『絵本朝鮮征伐記』（前編1853年（嘉永６）・後編1854年（安政元）刊行）・『朝鮮征討始末記』（1854年刊行）・『絵本豊臣勲功記』（1857年（安政４）－1884年（明治17）刊行）など、以後の壬辰倭乱物はすべてこの両作品の影響下に置かれる。

［註］

①『絵本朝鮮軍記』巻１「於伏見城朝鮮征伐治定」（韓国ソウル大学図書館蔵、巻１の25オ）。

②池内宏『文禄慶長の役　別編第一』（東洋文庫、1936）234－235頁。

③『太閤記』巻15「賀藤主計頭清正至都表入勢事」（新日本古典文学大系60『太閤記』（岩波書店、1996）424頁）、『豊臣秀吉譜』歯巻（韓国国立中央図書館蔵、84頁）、堀本『朝鮮征伐記』巻１「日本勢入王城事付加藤清正捕二王子事」（韓国国立中央図書館蔵、巻１の30ウ・31オ）。

④『清正高麗陣覚書』「長橋と申府中に王御通り候段札を立候事　附鍋嶋異見候へども清正承引不仕おして参候事　附りほいれぐ人王をとらへ置候通清正へ注進申事」（『続々群書類従　第４』（国書刊行会、1907）298頁）。

⑤この高札に似たようなものが、当時、実際に立てられたようである。宣祖25年６月28日丙辰条には「有人。書于粛川府柱曰。大駕不向江界。而向義州。或云寧辺之人。恐賊向其地。欲使賊。見書而知　上所在云。雖未知何人。蓋乱民所為也」となっている（『宣祖実録５』（民族文化推進会、1987）63頁）。

⑥『清正高麗陣覚書』「おらん海人の城一日ニ十三取事、附其内一の名城は清正自身乗崩し被申事」（前掲書、300頁）。

⑦池内宏は、新井白石の『藩翰譜』の「せるとうす＝節度使」説を取り、この「せるとうす」が、後に触れる朝鮮の『懲毖録』に登場する朝鮮の武将「韓克諴」と同一人物であると論証する（前掲書、255頁）。

⑧池内宏、前掲書、219頁。

⑨日本における柳成竜の著書『懲毖録』・『西厓先生文集』の受容に関しては平成16年度日本近世文学会春季大会において報告したことがあるが、その後に添加された内容があるので、ここでもう一度述べることにする。

柳成竜は1599年以後の４・５年間に草本『懲毖録』を執筆した。1642年（仁祖20）には、草本

『懲毖録』に他の記録を合わせた16巻本『懲毖録』が刊行された。今まで『懲毖録』の日本への紹介は、16巻本『懲毖録』の巻1・2に当たる2巻本『懲毖録』が『異称日本伝』に抄録され、1695年（元禄8）には、2巻本『懲毖録』を4巻に分けて訓点を付け、貝原益軒の序を付けた4巻本(和刻本)『懲毖録』が京都の大和屋伊兵衛から刊行されたのをその始めとしていた。ところで、対馬藩の宗家文庫の目録である『天和三年目録』には『懲毖録』1冊及び2冊の題名が記載されていて（藤本幸夫「宗家文庫蔵朝鮮本に就いて―『天和三年目録』と現存本を対照しつつ―」、『朝鮮学報』第99・100輯（朝鮮学会、1981）204頁)、すでに1683年の時点で『懲毖録』が日本に伝わっていたことが分かる。以後、1768年（明和5）には洒落本『北里懲毖録』が、1796年（寛政8）には佐々木恵吉の『懲毖録国字解』2巻が刊行されるなど、1800年刊の秋里籬島『絵本朝鮮軍記』10巻、『絵本太閤記』6篇（1801年）・7篇（1802年）刊行を前後して『懲毖録』への関心が高まっていったことが分かる。

また、『西厓先生文集』は、1632年（仁祖10）に「本集」20巻が、その後に「別集」4巻・「年譜」3巻が刊行された。『天和三年目録』には、『懲毖録』とともに『西厓文集』10冊・『西厓先生文集』24冊・『西厓集』10冊が記載されていて、『西厓先生文集』と『懲毖録』が、1683年の時点で対馬藩に共にあったことが分かる。しかし、『懲毖録』が17世紀後半以来、日本で広く読まれてきた反面、『西厓先生文集』は松浦允任『朝鮮通交大紀』や川口長孺『征韓偉略』などに『懲毖録』とともに引用されている程度である。『西厓先生文集』の流布はごく狭い範囲に限られた感じがあり、また、近世文学への影響の様子も今まで知られていなかったが、本発表者の検討によると、『絵本太閤記』7篇にその影響と考えられる箇所があるなど、検討の余地があると思われる。

⑩『朝鮮軍記大全』序（内閣文庫蔵)、『朝鮮太平記』序（内閣文庫蔵)。

特に、『朝鮮軍記大全』において、作者が叙述の中心に置いた『豊臣家譜』、即ち『豊臣秀吉譜』は、中国の明朝の『両朝平攘録』『武備志』などの影響を受けていることが明らかで、作者は、意識的であれ、無意識的であれ、戦争の当事国であった三国の作品を全部利用する結果となったのである。また、『朝鮮軍記大全』からの引用文の中の強調された文章は、1695年（元禄8）に京都で刊行された和刻本『懲毖録』に付いている「宜哉柳相国之作懲毖録也（中略）此書記事簡要為辞質直非世之著書者誇多闘靡之比談朝鮮戦伐之事者可以是為的拠其他如朝鮮征伐記雖書以国字亦足以為优証二書亶可稱実録也」(『懲毖録』貝原益軒序（東京大学図書館蔵)。強調は筆者）に類似している。これは和刻本『懲毖録』と『朝鮮軍記大全』の書肆が、同じ大和屋伊兵衛であることとも関係あるであろう。

⑪『朝鮮征伐記』「日本勢入王城事付加藤清正捕二王子事」（前掲書、31オ)、『清正朝鮮記』「清正帰陣被仕候節おらんかい人狼藉を仕候に付而又おらんかいの地へ発向候へば拵をこい礼に参候事」(『我自刊我書』（千秋社、1880）所収）24頁)。

⑫池内宏はこの「せいしう」を、韓半島と満州の境界地方にある「西水羅」に比定する（前掲書、254－255頁)。

⑬『朝鮮征討始末記』凡例（内閣文庫蔵)。

⑭『太閤記』巻15「賀藤主計頭清正至都表入勢事」(前掲書、424頁)。

⑮『清正記』巻2（新訂増補史籍集覧『清正記』(臨川書店、1967）356－357頁)『清正高麗陣覚書』・『清正朝鮮記』も類文。

⑯『続撰清正記』巻第3「朝鮮国の美女殺害相違の事」(国史叢書『続撰清正記』(国史研究会、1916) 270－271頁)。

⑰『懲毖録』巻2（前掲書、巻2の4ウ)。

⑱『朝鮮太平記』巻12「馮仲纓到安辺事」(前掲書、巻12の6オ)。

⑲たとえば、『清正高麗陣覚書』「長橋と申府中に王御通り候段札を立候事」には、「長橋といふ府中ニ着被申候、然所ニ長橋の町ニ札を立候て、高麗の王ハ御兄弟ともニ是より奥へ御通り候段申候」(前掲書、298頁)となっている。『清正記』巻二では、この札を立てたのが「金官」という朝鮮人であって、奥へと逃げた人は「王」でない「王子」となっているが、この「長橋」といった地名はそのまま受け継がれていて(前掲書、344－345頁)、『朝鮮太平記』巻之七「加藤清正与韓克誠戦事」も『清正記』に同じである(前掲書、巻7の2ウ)。ところで、『朝鮮太平記』と同年に刊行された『朝鮮軍記大全』巻9「清正直歳分路並清正擒二王子事」では、「永興府ト云フ処ニ着タリケリ。是ゾ俗ニ云ヘル永橋ナリ永興永橋音同再誤テ永ヲ長トナスカ此処ニ高札ヲ掲ゲ(中略)太子ノ従臣金貴栄ガ名ヲシルス」(前掲書、巻9の2ウ。強調は筆者)となっていて、「俗」説、即ち加藤系作品の記述を訂正している。この後の壬辰倭乱物はこの『朝鮮軍記大全』の記述に従って「永興」・「金貴栄」という名前を受け継いでいる。また、小西が加藤の都への進路を妨げたとしている『太閤記』巻13「小西都入之事」(前掲書、369－370頁)及び『清正記』巻2(前掲書、343頁)の記述を批判して、巻7「王城途中陥郡県事」では「察スルニ清正ヲ贔負ノ俗説ヨリ彼ガ遅滞ヲカクサン為ニ好事ノ者ノ説造ルト見ヘタリ」(前掲書、巻7の4オ。強調は筆者)とも記しているのである。

⑳『朝鮮軍記大全』巻9「清正執二王子有情之事」(前掲書、巻9の9ウ・10オ)、『絵本太閤記』6篇巻之5「加藤清正擒両太子」(韓国国立中央図書館蔵、6篇巻之5の12オ。強調は筆者)。この二作品の記事は類文で、特に、強調された文章はほとんど同文である。

㉑『兩朝平攘録』(朝鮮史料叢編『壬辰之役史料滙輯(下)』(全国図書館文献縮微複製中心出版、1990)157頁。

㉒『豊臣秀吉譜』爵巻(前掲書、103頁)、『朝鮮征伐記』巻八「蔚山を攻むる事」(前掲書、71頁)。

㉓『絵本太閤記』7篇巻之8「加藤清兵衛勇智砕明兵之軍威」(前掲書、7篇巻之8の14ウ・15オ)。

㉔「両王子主計頭の懇情を感じ、一通の状を加藤右馬允がもとへつかはされけり(手紙の内容は省略)」(堀本『朝鮮征伐記』巻一「日本勢入王城事付加藤清正捕二王子事」(前掲書、33ウ))。

㉕「朝鮮王ノ官人。王命ヲ蒙リ。日本秀吉公ニ呈書(手紙の内容は省略)秀吉公。書簡披見アリ。甚タ悦喜シ。吾カ日本之弓箭之風ヲ異国ニ知ラレ。清正カ生祠。後世ニ遺ルヘシ。清正ニ書簡ノ写ヲ遣シテ。武名ヲ賞スヘシトテ。早艇ヲ以テ。西生浦城ニ至ル。清正。年寄共ヲ呼集メテ之ヲ見セ。家人ノ功ヲ賞ス」(『加藤家伝清正公行状奇之巻』(『続群書類集　第二十三輯上』(続群書類集完成会、1990訂正3版)426－428頁))。

「朝鮮国王李昭　呈書豊太閤称清正徳威其文曰(手紙の内容は省略)肥後国飯田郡中尾発星山本妙寺為什物毎歳秋七月以虫払之時許拝見」(『絵本太閤記』6篇序(前掲書、6篇巻之1の首丁))。

『加藤家伝清正公行状奇之巻』の末尾には、加藤が建てた本妙寺に「和漢ノ書籍多ク納マル(中略)朝鮮国地理図一幅　朝鮮王子書翰　安南国書翰　右之外。朝鮮来書ノ写等奉納本妙寺」(前掲書、447－448頁)と記されていて、王子の手紙等がこの寺に納められているとして、『絵本太閤記』の作者はこの手紙を見たようになっている。しかし、両書に収録されているいわゆる朝鮮王の手紙の内容は相違っていて、手紙の真偽その自体も疑わしい。

㉖『清正記』巻2(前掲書、347頁)。

㉗このオランカイへの攻撃の目的については、対立的な二つの見解が提示されている。「このあと、清正は七月末から八月末にかけて豆満江を渡ってオランカイに入り、九月二十日、安辺に帰陣した。この清正のオランカイ侵入の目的はオランカイから明への道を探ることにあったと考えられる」(北島万治『豊臣秀吉の朝鮮侵略』(吉川弘文館、1995)71頁)、「清正の兀良哈征伐が、武威を兇暴

なる野人の間に示さんとする武士的好奇心に出で、他に特別な目的のなかりしを看るべきなり」（池内宏、前掲書、252頁）。

㉘『朝鮮軍記大全』巻９「兀良哈人与清正合戦事」（前掲書、巻９の10オ）。

㉙『絵本太閤記』６篇巻之５「加藤清正討兀良哈」（前掲書、６篇巻之５の12オ・13ウ）。

㉚『清正高麗陣覚書』「吉州より至来有之ニ付てあんへんより北青と申所迄七日路清正被戻候事　附鍋嶋異見之事」（前掲書、307－308頁）、『清正記』巻２（前掲書、357－358頁）。

㉛日本の古代・中世文学における「三韓」は広く外国を指す言葉で、『承久記』の「鬼界・高麗・契旦ノ三韓」（新日本古典文学大系43『保元物語　平治物語　承久記』（岩波文庫、1992）300頁）のように、意味の極端的な拡張まで見られる。

㉜金光哲『中近世における朝鮮観の創出』（校倉書房、1999）では、この「被侵略意識」を「新羅「日本攻撃説」」と呼んでいる。

㉝『太平記』第39巻「自太元攻日本事同神軍事」（『西源院本太平記』（刀江書院、1936）1127頁）、『太平記』巻第40「蒙古日本を攻むる事付けたり神戦の事」（新編日本古典文学全集57『太平記４』（小学館、1998）420頁）。

㉞『豊臣秀吉譜』歯巻（前掲書、68頁）、『朝鮮征伐記』第１「朝鮮蜂起並肥前国名護屋城普請」（国史叢書『朝鮮征伐記１』（友文館、1916）50頁）。

㉟壬辰倭乱物において、第一次の晋州城の合戦、朝鮮の王子の行方を知らせる高札との出会い、オランカイとの合戦、そして、朝鮮・明の連合軍に囲まれた日本軍の蔚山篭城、等の記事で八幡の加護に言及する。

㊱小峯和明「琉球文学と琉球をめぐる文学—東アジアの漢文説話・侵略文学—」（『日本文学』53号（日本文学協会、2004．４））、同「＜侵略文学の位相＞—蒙古襲来と託宣・未来記を中心に、異文化交流の文学史をもとめて—」（『国語と国文学』（東京大学国語国文学会、2004．８））。

＊討議要旨

大高洋司氏は、「絵本朝鮮軍記」におけるオランカイの東西の位置関係の逆転は絵師がごまかしたのではなく、富士山の位置関係からそうせざるをえなかったのだと述べた。また、なぜ加藤清正が仁義の将として理想化されたのかを尋ねた。発表者は、豊臣秀吉と同様で滅亡した家に対する同情だと思うと答えた。

ロバート・キャンベル氏は、幕末の列国の侵略を考慮した時の、防御戦としての三韓征伐の別の意味付けを尋ねた。発表者は列国の影響が庶民にまでは及んでいないと思うと答えた。